令和６年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標 (令和6年度策定)	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月６日実施）	総合評価（３月 24 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①SSH の取組と各教科での取組を相関させ、問題解決能力の育成を図る。 ②新たな教育課程に基づく生徒の進路実現を達成するために指導環境の整備と教育課程の検証・改善および生徒の学習体制の構築を行う。	①ICT を活用した授業展開を行い、学習内容の質を高めるとともに、SSH の取組と教科の取組を結びつける。 ②「指導と評価の一体化」を踏まえた主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を進め、生徒の自主的な自宅学習の向上を促す。	①各教科で、引き続き授業改善に取り組み、ICT を効果的に活用する。 ①デジタルポートフォリオ等を利用し、生徒一人ひとりが教科を越えて学びの総活ができる仕組を構築する。 ②指導と評価が一体化した年間指導計画を整え、教科を越えて主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善を進める。	①各教科で、授業改善に取り組み、その成果としてデジタルポートフォリオの活用ができたか。 ②指導と評価が一体化した年間指導計画が立てられているか。 ②教科を越えた授業改善が行われたか。	①10 月に開催した公開研究授業などを含め、教育目標に掲げる育成する５つの能力を意識した授業改善を行うことができた。 ①７教科 10 科目での取り組みがデジタルポートフォリオとして「Pサイト」に掲載された。 ②年度当初に設定をした評価規準に基づき、各観点を通した評価を行うことができた。	①研究授業にとどまらず、各教科の実践を校内で更に共有できる体制を検討。デジタルポートフォリオの目的を教員で改めて共通認識し、より多くの科目での運用を目指す。 ②教科横断的な活動や前年度の達成状況を加味した評価規準をもとに、年間計画を作成し、達成に向けた指導の工夫を図る。	①教科連係、教科横断的な活動について、探求学習と連携し探求課題の検討に発展・展開できるように実施してもらいたい。 ②生徒や保護者からのアンケート内容を数字化して、達成状況を比較検討できるようにして、よりよい授業改善に取り組んでもらいたい。	①研究授業など互いの授業を見合う体制を構築することができているが、教科内での共有に留まりがちである。また、「P サイト」については本来の目的と活動内容が少し解離している点が見受けられる。 ②授業改善の達成度の確認について具体的な指標がないため、次年度以降検討していきたい。	①日頃の授業内容など各教科の取組を教科を超えて共有する手法を検討する。「P サイト」運用の目的である「メタ認知」に対する教員の理解を深める。 ②授業評価アンケートなどにおける教科横断を意識した授業を感じた割合が一定数を超えるよう検討する。
2	（幼児・児童・） 生徒指導・支援	①日々の学校生活や生徒会活動の場面で、自発的・主体的に行動できる人材の育成を図る。 ②教育相談体制を充実させ、支援が必要な生徒に対して柔軟な働きかけを行う。	①学校行事や部活動など学年を越えた集団活動を通して、個々の役割を自覚し、それぞれの責任を果たす姿勢を身に着けさせる。 ②支援が必要な生徒の情報を職員全体で共有し、すべての生徒が健康で安全な学校生活が送れる体制を整える。	①主体となる生徒との連携を密にし、情報共有を行い、支援・指導が必要なポイントを絞り安全で安心な活動を保障する。 ②校内での教育相談担当者を中心に、家庭や SC・SSW と連携を図りながら課題の解決をサポートする。	①健康的で安全な行事が実施されたか。生徒の主体性を支援することができたか。 ②課題を抱える生徒に対し、様々な視点を持った多くの職員がかかわることによって、多角的に支援することができたか。	①記念祭・合唱祭など年間の主となる行事が生徒の主体的な活動のもと実施され必要な支援をすることができた。 ②課題を抱える生徒に対し学年団のみならず多くの職員が関わり、多方面にわたった支援ができた。	①時代の流れや、気候の変動などに伴う行事の縮小化や日程の見直しについて検討していく必要がある。 ②教育相談について一部職員の負担を軽減するため、問題発生時の対応をマニュアル化していく。	①行事の形式を従来通りではなく、学校組織の現状や地域との連携の中で、現状に適合した形式に変更することが重要なのではないか。	①学校行事・部活動等大きな事故なく安全な活動を支援できた。一方で係の生徒だけが疲弊する傾向が年々顕著になっている。全校の意向をくみ取りながら必要最小限の労力で達成感を味わえる環境づくりに配慮したい。 ②課題を抱える生徒への対応について、一部の職員に負担がかかっている状況があるため、マニュアル化し、組織的な対応を図る必要がある。	①行事や部活動で継承されている伝統の見直しを行う。時代の流れ、周囲への配慮を念頭に置き、生徒会活動、特別活動を支援していく。 ②悩みを抱える生徒が支援を求めやすい環境づくりとして、教育相談体制をフローチャート化し職員に共有する。窓口を増やし多くの職員が関わることができる体制づくりをする。
3	進路指導・支援	①なりたい自分を探求し、その実現を目指すための進路行事や学習活動を充実させる。 ②個別面談、教員研修を通じ、新たな教育課程や入試制度に柔軟に対応することのできる支援体制を構築する。	①生徒の個々の進路目標を見据えた進路指導・進路行事を計画し、その充実を図る。 ②面談や模擬試験の機会を活用し、生徒の悩みや進路実現に向けた適切な支援を行う。	①生徒が多様な選択肢を理解し、具体的な進路をイメージできるような進路指導・進路行事を計画し、その充実を図る。 ②模擬試験の振り返りや面談を通して、生徒の強みや弱みを把握し、具体的な対策や学習計画を支援する。	①適切な時期・内容でキャリアガイダンスを行うことができたか。 ②模擬試験の振り返りや面談を通して、生徒の課題の把握やフィードバックができたか。	①各学年、生徒のモチベーションを維持するため、適切な時期に進路集会の形でガイダンスを行うことができた。 ②ベネッセ・河合塾が提供する模試結果の分析システムを使い、個々の生徒に寄り添ったアドバイスを各クラスで行うことができた。	①進路行事・ガイダンスの時期・内容が適切であったか、１年間の振り返りを通して検証する必要がある。 ②進路先（出口）のサポートだけでなく、教科指導を通して生徒のサポートをできているかを考える必要がある。教科会を通し、検証する。	①各学年で段階を追って進路指導するように指導計画を整備したことは評価できる。SSH の探究活動や学校外のコンテストなど実績に基づく推薦選抜や総合型選抜の実績が増えることを期待したい。	①３年間の進路指導計画を整備し全職員で共有できた点は、成果として評価できる。 ②学校推薦型選抜や総合型選抜の実績について、コンテストや校内での探求活動の実績はあるものの、それが選抜試験に具体的につながっていないことが課題である。	②特に学校推薦型選抜や総合型選抜において、大学が求める人材についての理解を深めるとともに、ただ「取り組んだ」「賞を取った」に留まらない、成功体験や失敗体験につながる活動を目指す。

	視点	４年間の目標 （令和6年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価	総合評価（３月 24 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等	（３月６日実施）	成果と課題	改善方策等
4	地域等との協働	①家庭や地域、同窓会等との協働を進め、信頼される学校作りの更なる発展を目指す。 ②SSH の活動において他の教育機関や企業・地域との連携を強め、コンソーシアムの構築を目指す。	①保護者や地域住民等と協働・連携した教育活動や地域貢献活動等を充実させ、様々な手段で外部に発信する。 ②SSH 指定の取組について、地域社会等にＰＲするとともに、大学等との連携を強化していく。	①学校ホームページ、学校説明会、文化祭及び地域貢献デーなどの行事を通じて、地域の小中学校と連携した実績や SSH の取組について発信する。 ①同窓会活動への理解を深めるために協働して活動の改善点を検討していく。 ②SSH 運営指導委員である大学教授等の指導・助言を生徒研究に直接反映できる仕組を構築する。	①学校ホームページ、学校説明会、文化祭及び地域貢献デーなどの行事を通じて本校の取組を発信できたか。 ①同窓会と連携し活動への理解が深められたか。同窓会入会者の数が増えたか。 ②SSH の活動の中で大学教授等の指導・助言を生徒研究に反映できたか。	①学校説明会では、生徒会役員と協力し、内容の見直しを行った。本校の特色や魅力を明確に伝えることができた。今年度は部活動体験も同日開催したことで、受験生の満足度も高かった。事前予約では部活動体験と学校説明会の申込期日が異なり、混乱を招いた。 ②研究計画書を事前に有識者の方に見ていただくことで、研究テーマの妥当性について教員・生徒ともに考える機会を作ることができた。	①生徒が伝えたい内容と教員が伝えたい内容の乖離をなくし、本校がどのような生徒を求めるのか、共通理解をもって進めていく必要がある。学校説明会・部活動体験の案内をより分かりやすくする必要がある。 ②年に２回の機会を効果的に生徒研究に反映できたかというと疑問が残る。次年度から行う「外部連携」により、これまでより指導・助言をもらう回数が増えるためこの点を生徒研究の発展に生かす。	①探究活動や学外のコンテストなどの実績に基づく、推薦選抜や総合型選抜の実績が増えることを期待している。またその実績を、学校説明会等を通じ校外へアピールすることや、在校生・保護者へも周知することでより探究学習に厚みを持たせることを期待したい。 ②引き続き、桜蔭会（同窓会）や希望ケ丘商店街とも共同して SSH の探究活動や部活動など、より充実させていくことも検討してもらいたい。	①学校説明会などを通じ、教職員と生徒会役員が協働し、今まで以上に学校の魅力や特色を伝えることができアンケートでも高評価を得ることができた。 ①学校運営協議会を通し、委員の方々から貴重な意見をいただく機会を持つことができた。 ②次年度から「外部連携」を実施できる体制を整えることができた。来年度は実施初年度と様々な課題が出てくると考えられる。	①学校説明会では本校がどのような生徒を求め、これからどのような学校にしていくのか、現在の活動内容や進路実績など説明会で伝える内容、方法を生徒とさらに検討していく。 ②見つかった課題の１つ１つをに対し外部メンターの先生方と連携しながら解決していく。
5	学校管理 学校運営	①働き方改革に向けて、Teams や ICT 機器の使用方法を更に思索し業務の効率化を図る。 ② 生徒主体の学校行事等をさらに発展させ、課題発見・解決能力の育成を図る。 ③社会から求められる様々な教育ニーズに対応できる教員指導力の向上を目指す。	①業務の効率化に向けて有用なツールの導入を検討する。 ①各種の研修を通じて、教職員の ICT 活用スキルを高める。 ②学校行事の際に、ICT 機器を積極的に活用していく。 ③人権や教育相談の視点から生徒との関わりを再点検する。	①一部の科目で試験的に新たなツールを導入し運用に向けた準備を整える。 ①各種の研修を通じて、教職員の ICT 活用スキルを高める。 ②文化祭や陸上競技大会等で、Teams や Forms 等を活用し、ペーパーレス化や円滑な運営を図っていく。 ③様々な研修会を通して、人権や教育相談といった視点から、これまでの教育活動を見直す機会とする。	①次年度の予算を確保し本格導入に向けた準備ができたか。 ①教職員対象の ICT 活用スキルを高める研修が実施できたか。 ②Teams や Forms 等を活用し、連絡やアンケートがスムーズに行われたか。 ③研修を通じて、職員の共通理解が深まったか。	①デジタル採点のツールを試験的に導入し、４教科で運用された。採点業務における業務の効率化を図れた。 ①年度始めに「デジタル・ポートフォリオ」に関する研修を実施した。 ②様々な場面で Teams・Forms を活用する場が日常化してきている。 ②研修を通して理解した内容を積極的に授業に活用する職員が増えている。 ③１回：デートＤＶ、２回：ＬＧＢＴＱ、３回：対人関係のスキルと適切な交際関係を築くために、をテーマに外部講師を招いて研修を行った。３回は１，２年生徒と教員を対象とした。職場において普段から心がけなければならないこと、疑問や不安を持つ事柄について講師に質問ができた。	①次年度から県で予算化される予定。ツール変更への対応。さらに活用教科・科目を増やしていく。 ①研修の回数、他の教員の取組の共有、どちらの点も充分ではなかった。教員のニーズを把握し、負担減と専門性の活用のために、外部講師を招き、より効果的な研修を検討・開催していく。 ②一人一台 PC・Teams の活用が進み、同時に複数教室で Teams を使用して授業を行うと通信に不具合が生じる。SS 希望など学年が一斉に同じ作業をすると教室では作業が進まなくなる。通信環境の整備が急務である。 ③研修において理解が深まる人、過信が障害となり理解が深まらない人、様々であるが、その時々にあったテーマで今後も継続していく。	①②③時代に沿った先進的な取組を行っていると感じた ①③外部講師を積極的に招いて、教職員の負担軽減・スキルアップを積極的に目指して欲しい。	①デジタル採点等、職員の業務負担を削減するツールを活用する機会が増加した。今後、デジタル採点に対応する作問を増やすなど生徒の学びと並行して、職員の負担減、そこから生まれる時間的余裕を生徒に還元できるようにしていく。	①外部指導者・専門家を招聘するための予算を活用し、より多くの職員へデジタルツールへの理解を進めていく。